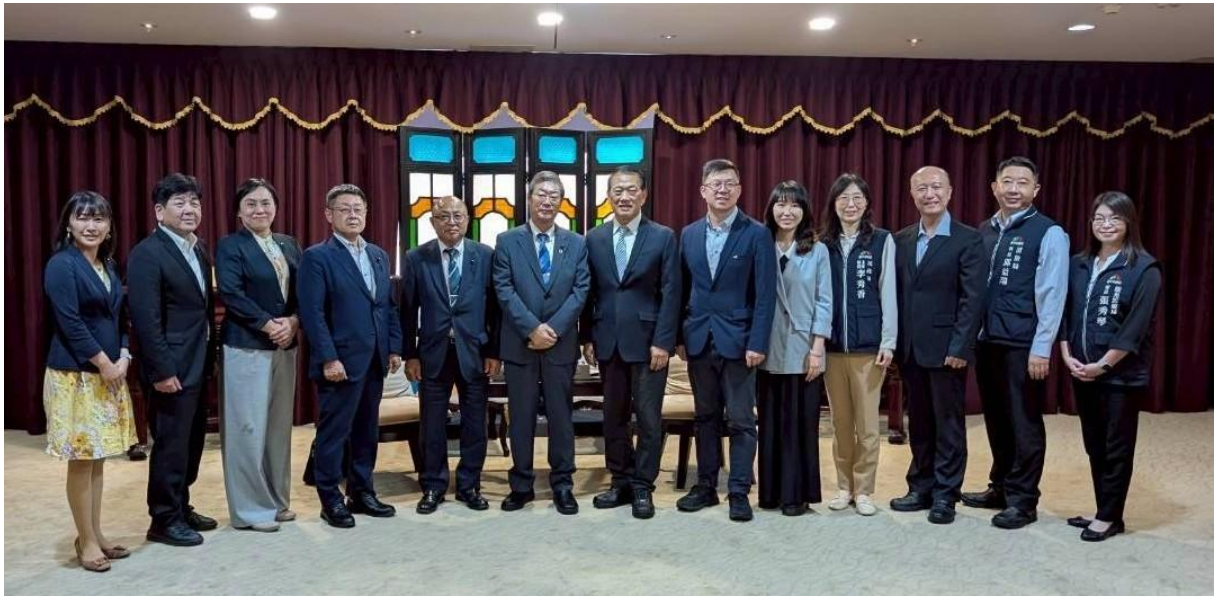


令和7年度 鳥取県議会台湾訪問団 報告書

〔2025年10月27日(月)～10月30日(木)〕



《台中市政府にて、張副秘書長（右から7番目）台中市政府職員の皆さんと》

鳥取県議会

1 訪問日程及び訪問先

令和7年10月27日（月）～10月30日（木）

台北市、台中市

※詳細は「4 日程表」のとおり

2 訪問団メンバー

団長 银杏 泰利 議員

副団長 鹿島 功 議員

秘書長 安田 由毅 議員

西村 弥子 議員

前原 茂 議員

山本 暁子 議員

<随行> 議会事務局 調査課 課長補佐 濱口 義明

調査課 主 事 野嶋 奈生子

観光交流局 交流推進課 国際交流員 史 耘

3 所感及び県政に対する提言

今回の県議会による台湾訪問団は、本県の観光産業の振興、県産品の輸出拡大・販路開拓及び学校間交流等を図るため、本県と台中市との地域間交流の現状や課題、台湾からの観光誘客に向けた現地動向と課題、台湾における農産品等の物流状況、教育交流の取組等について調査することを目的に、台北市及び台中市を訪問した。

県議会としての台湾への公式訪問は、2004年から始まり、台中市とは合併前の台中県時代を含め、2005年から2019年まではほぼ毎年のように訪問して交流を積み重ねた。そして、コロナ禍による3年間の中断期間を経て2023年に訪問を再開し、今回で通算14回目を迎えたところである。

今回の訪問団は、台中市政府への表敬訪問のほか、台湾日本関係協会や日本台湾交流協会を訪問し、台湾現地の現状や動向をお伺いしつつ、日台の地域間交流、観光交流等について幅広く意見交換を行った。台北市の旅行会社スタートラベルでは、日台双方の観光誘客の動向や課題についてご意見を伺い、タイガーエア台湾では、本年5月に就航した米子台北便の就航後の状況や今後の展開等について意見交換を行った。新日緑建材股分有限公司では、一昨年、台中市内に開設された県産木材製品のショールームを視察し、現地のニーズや県産木材の海外展開促進に向けた今後の取組等について意見交換を行ったほか、地元の高級スーパーの裕毛屋では、本県産品のほか日本各県産品の販売現状を視察するとともに、本県産品への評価や一層の定着化、販売拡大等に向けた取組について意見交換を行った。台中市立日南国民中学校では、日台の学校間交流の更なる推進や、県内高等学校による教育旅行、教育交流の拡大・推進等について意見交換を行った。更に、台中市内の災害救助犬センターでは、自然災害等有事に備えた災害救助犬の育成・訓練の取組状況を視察した他、同センターに隣接する921地震教育園區では、1999年に発生した921大地震（台湾大地震）の教訓を踏まえた防災意識の啓発など、地震教育の取組状況を視察した。

以下、これらの概要と成果を報告する。

はじめに、台湾からのインバウンド誘客や観光振興に関する現状と今後の可能性について、現地調査に基づく所感を述べたい。

非政府間の実務関係として維持してきている日台間において、日本と台湾との交流関係を維持する実務機関として、台湾側の台湾日本関係協会と現地で日本の在外公館が行う業務に類する事業を展開している日本側の公益財団法人日本台湾交流協会によると、昨年（2024年）の台湾からの訪日旅行者は604万人で、前年から180万人超も増加しコロナ禍前（2019年）の489万人を超えたとのことである。民間交流、地方自治体間の交流も活発に行われ、台湾の人々の日本に対する好感度も非常に高い状況にある。他方で、台湾を訪問する日本人の数は、昨年（2024年）は132万人で、前年から39万人の増加となったものの、台湾から日本への旅行者が日本から台湾への旅行者の人数を大幅に上回る状況がコロナ禍前より続いており、近年、その差は益々拡大してきている。

台北市にある旅行会社のスタートラベルでは、本県のほか訪日旅行商品の販売状況などを伺ったが、本県への団体旅行は米子台北間の直行便が就航して以降安定しており、今後も引き続き、旅行商品の充実を図っていくとのことであった。また、同社からは、本県に台湾から更なる誘客を図る上での課題として、団体向けの二次交通（バス等）の充実や食事場所の確保（夜間営業時間の拡大）などが指摘されたところである。これらを踏まえ、本県内における団体旅行者の受入態勢の整備のほか、観光情報発信の更なる強化、冬季における観光コンテンツの充実（例えば、砂丘観光の上質化、砂の美術館の開催期間拡大等）、また、リピーターの確保・増加のためにも全県域での新たな観光ツアーの造成や観光コンテンツの磨き上げにかかる支援強化等を提案したい。

また、タイガーエア台湾では、米子台北便就航後の状況についてお話を伺い、今後の動向・展開についても意見交換を行った。本年10月の搭乗率は8割程度であり、乗客の割合は台湾人が8割、日本人が2割であるが、日本の地方空港の中では日本人乗客率は比較的高い方である。同社は、本県との連携による本路線の搭乗率向上と収益向上に意欲的であった。台湾から本県を訪れる旅行者は、団体客の他、個人客も相当の割合で搭乗しており、今後、個人客をターゲットにした対策の強化も必要である。団体客は比較的高齢者層が多く、一方で、個人客には若者世代が多いとのことであり、世代間で訪日旅行に対して求めるニーズも異なるため、各層のニーズを的確に把握しこれに対応する旅行商品の造成等の取組を進めるべきである。例えば、中年から若者層、女性をターゲットに、温泉、グルメ、アクティビティ（ゴルフ、スキー、サイクリング、トレッキング等）の健康をテーマにしてプロモーションすることも考えられる。

本県は、鳥取砂丘や山陰海岸、大山などの雄大な自然景観や、当地での自然体験、松葉ガニや鳥取和牛、四季折々で楽しめる新鮮で豊かな旬の食材、数多くの特色ある温泉など、幅広い年齢層の多様なニーズに対応できる上質な観光資源と十分なポテンシャルを有している。まずは、インバウンドにかかる最新のニーズを的確に把握、分析した上で、各層に対して、本県の魅力や観光コンテンツを的確に訴求していくため、きめ細かい観光情報の発信や、ターゲットに直接刺さる効果的な広報展開が求められる。

また、現在、米子台北便の搭乗率は好調であるが、本航空路線を直行便として継続していくためには引き続き高い搭乗率を安定的に維持していくことが重要である。そのためには、台湾から本県へのインバウンドだけでなく本県から台湾へのアウトバウンドを両輪として、双方向の交流拡大に取り組む必要がある。今回の台湾訪問を通じて、「食」をはじめ、文化面や、人と人との交流など、様々な点で日本と台湾には親和性があると感じられたところである。台湾各地の観光スポットの他、

食、文化、アクティビティ、その他の観光コンテンツなど、県民に対して、その魅力をより効果的に広報周知することなどを通じてアウトバウンドを促進するとともに、これらに加えて、例えば、後で述べる県内高等学校の台湾への修学旅行など、教育旅行の推進も検討すべきと考える。2025年は、念願であった米子台北間の直行便就航、日台観光サミットの鳥取開催など、日台交流の機運が大きく高まった年であり、この時機をとらえ、双方向での更なる交流拡大に向けて、各分野での取組を強化、促進していくことが必要であるとする。

次に、台湾への県産品の輸出拡大・販路開拓等についての所感を述べたい。

今回の訪問で、台中市内の高級スーパーマーケット「裕毛屋公益店」を視察、調査した。同店舗においては、10月24日から26日までの3日間、今年で10回目となる鳥取県物産展が開催された直後の訪問であったが、物産展終了後も、本県の代表的な特産品である新甘泉や輝太郎などが店舗入口の最も目立つ場所に配置されていたほか、鳥取和牛、ベニズワイガニ、星空舞、日本酒、ワイン、菓子類など、生鮮品や加工品も含め、多種多様な県産品が陳列され、販売されていた。本県だけでなく、日本各地の様々な生鮮品、加工品等の取扱いがある中、とりわけ本県産品の取扱いはかなり充実していた。同店舗は、無添加、有機栽培、自社製造にこだわり、安心安全で高単価であるが付加価値の高い商品を中心に取り扱いしており、主に現地の富裕層をターゲットにして展開されていた。日本の各地域が誇る多種多様な産物の取扱いがある中で、特に、素材のもつ美味しさ、新鮮さ、安心安全、高品質、高付加価値など、本県産品が持つ強み、特色を効果的にアピールして他地域産品との差別化、「鳥取県産」の更なるブランド化を図ることで、より一層の販路拡大、輸出促進に取り組むことが重要であるとする。また、併せて、ジビエなど新たな可能性をもつ県産品についても、現地ニーズの掘り起こしや販路拡大に向けた取組を推進していくべきである。

また、新日緑建材股分有限公司では、2023年10月に、鳥取県木材協同組合連合会及び鳥取県木質内装材開発・販売推進協議会が県の支援を受けて台中市に開設した県産木材製品のショールームを視察し、開設後の状況や現地の動向など調査を行った。台湾の住宅はコンクリート造が主流であり、内装に木材を取り入れてもらうよう、LVL（単板積層材）という用途に応じて加工が容易な木質建材のセールスに注力されていた。ショールーム開設後において、内装材の売り込みは順調に進んでいるが、固定客は台湾北部の1件ということで、今後、台中市、台南市での展開に取り組まれるとのことであった。台湾では台湾内木材の伐採が禁止されており、原木の需要に対しては、ニュージーランドやカナダなど外国からの輸入に頼っているとのことである。この点、本県産材の台湾展開にあたり、目指すべき方向性としては、原木そのものの輸出ではなく、高品質・高付加価値のある加工製品を、その良さを十分に理解して頂いた上で、安定的、継続的に取引できる固定客を増やしていくことだと考える。そのためには、商談会・バイヤーとの意見交換会や、建築・建材見本市などの展示会への出展やプロモーション、現地での販売促進活動の取組みを一層強化するとともに、県産木材製品の本格展開を見据え、更なる販路拡大に向けて、県としても引き続き支援を行っていくことが必要である。

次に、学校間交流と教育旅行にかかる現状とその促進について、所感を述べたい。

本県と台中市は、2005年から青少年（中学生）の相互派遣事業を行っている。県内の様々な中学校の生徒及び教師からなるサマースクール団が、台中市内の学校訪問や本県と縁のある施設の訪問、

ホームステイ等を通じて交流しているほか、隔年で、台中市内中学校のサマースクール団を鳥取県内に受け入れることで、両県市において相互に青少年の交流を深め、国際理解の向上を図っているところである。また、県内市町村レベルでも自治体の独自の取組による学校間の教育交流も進んできており、琴浦町立東伯中学校・赤碕中学校が台中市立日南国民中学校と友好交流協定を締結して、昨年度から相互交流を開始するなど、両地域における中学校レベルでの教育交流は、年々深化してきているといえる。今後においても、様々なレベルでの教育交流を継続し、生徒・児童への教育的要素も考慮しつつ、交流事業の内容もより充実させながら、引き続き相互交流を深めていく取組も必要であると考えます。

特に、今回訪問した台中市立日南国民中学校においては、本県内中学校との相互交流について、非常に熱意をもって意欲的、積極的に取り組んでいる。今回、同校で意見交換を行った際、中学校レベルにおいては相互交流が進んできているが、今後は、高等学校レベルにも教育交流を拡大し、相互交流を推進していきたいとのこと、ご要望を伺ったところである。また、本県内高等学校の修学旅行などでは、台湾への教育旅行の際、訪問・滞在先として台北市が選択されることが多いとのことで、今後は、台中市も訪問していただき、台中市内の各学校も訪れてもらいたいとのこと、ご要望もいただいた。そして、同校からは、台中市内には進学校の他、工業高校、農業高校、高等専門学校など様々な学校があり、本県内の学校に合わせて交流先をマッチングすることも可能とのこと、ご発言も頂いたところである。現在、本県と台中市との教育交流は中学校を中心に行われているが、今回の訪問調査を踏まえて、県内高等学校においても、台中市内の高等学校との相互交流の推進や、教育旅行も含めた教育交流の拡充について提言したい。異文化への理解を深め、グローバルな視野を養い、また、コミュニケーション能力の向上や、新たな視点からふるさとの良さや課題を再発見する機会となりうる教育分野での相互国際交流を高等学校にも拡大・推進することは、本県の青少年教育、人材育成を進める上で非常に有意義な取組であると考えます。また、教育旅行の更なる推進にあたっては、タイガーエア台湾による米子台北便を活用することにより、直行便搭乗率の維持・向上という副次的な効果も期待できる。

これらを実現するためには、本県教育委員会及び知事部局において、教育、国際交流等を所管する部局が縦割りを排して緊密に連携しながら、台中市との調整を行っていく必要がある。実現までの過程において、長期間にわたる調整や準備が必要になると見込まれるが、グローバル人材の育成に力を入れている本県において国際交流により国際理解を深め、地域や国際社会で主体的に活躍できる人材の育成に繋がるものと考えるため、実現に向けた今後のロードマップを策定するなど、取組を前に進めるため、是非検討をお願いしたい。

次に、台湾における災害時対応、地震教育の取組について、所感を述べたい。

台中市内の防災関連施設として、災害救助犬の育成を行う災害救助犬訓練センター及び1999年に発生した921地震（台湾大地震）の記憶、教訓を次の世代に伝えるために設立された921地震教育園区を視察した。921地震教育園区では、同地震で実際に倒壊した中学校の校舎を保存し、震災の実態と平時からの防災意識や防災減災の取組の重要性を学べる教育施設となっていた。防災をテーマに、様々な観点で子どものうちから遊びを交えて学ぶことを大切にしているとのことで、地震に強い建物の模型づくりコンテストの開催や、被災地での宿泊体験、体験型の防災学習を毎年行っているとのことであった。

世界有数の災害大国である我が国においても、今後想定されうる南海トラフ地震など大規模自然災害への備え、平時における防災意識の啓発、子どもだけでなく大人も含めた防災教育の取組を推進していくことは、非常に重要である。本県においても、鳥取県中部地震から10年の節目に行われる「ぼうさいこくたい2026」開催を来年に控える中で、過去に大きな被害を出した、鳥取地震、西部地震、中部地震など過去の記録や教訓について、子ども達も含めて県民へ分かりやすく伝え、平時において県民の防災減災意識を高める防災教育、啓発活動をさらに強化し、これを一過性のものではなく、継続的な取組として行っていくべきと考える。

最後に、今回はじめて訪問したスタートラベル社、災害救助犬訓練センターをはじめ、台湾日本関係協会、日本台湾交流協会、タイガーエア台湾、新日緑建材股分有限公司、台中市立日南国民中学校、裕毛屋公益店、台中市政府、921地震教育園區など、お忙しい中にもかかわらず快く訪問を受け入れ、熱烈な歓迎をしていただいたことに対して、心より感謝したい。今回の訪問を通じて、これまで培ってきた日本と台湾の絆の深さと協力関係が築かれてきた成果が健在であることを改めて実感したところである。

当議会としても、引き続き、台中市をはじめとした台湾との間で、地域間交流、県産品の輸出、観光交流、青少年教育交流など、様々な分野において親密な協力関係を継続・発展させていくとともに、我々の悲願として本年実現した米子台北間の直行便の維持継続のためにも、観光を含めた人的交流や物流の更なる加速化など、様々なレベルで台湾との交流を積極的に推し進めていくべきと考える。

今後、今回の台湾訪問から得た成果に基づき、さらなる情報発信や政策提言を行い、日台間のさらなる友好親善と相互交流の発展に尽力することを誓い、所管及び県政に対する提言とする。

4 日程表

月 日	日 程		移 動	宿 泊
10月27日 (月)	13:00	米子鬼太郎空港→桃園空港	IT725	台北市内
	18:00	・台湾日本関係協会《意見交換》	借上バス	
10月28日 (火)	09:30	・日本台湾交流協会台北事務所《意見交換》	借上バス	台中市内
	10:30	・スタートラベル《意見交換》	借上バス	
	13:15	・タイガーエア台湾《意見交換》	借上バス	
	15:11	台北→台中	高速鉄道	
	17:00	・新日緑建材股分有限公司《視察・意見交換》	借上バス	
	18:30	・株式会社裕源 裕毛屋《意見交換》		
10月29日 (水)	10:00	・台中市立日南国民中学校《視察・意見交換》	借上バス	台中市内
	12:00	・裕毛屋公益店《視察・意見交換》	借上バス	
	14:00	・台中市政府《表敬・意見交換》	借上バス	
	15:00	・災害救助犬訓練センター《視察》	借上バス	
	15:30	・921地震教育園區《視察》		
10月30日 (木)	09:32	台中→台北	高速鉄道	
	13:35	台北松山空港→羽田空港	NH852	
	19:20	羽田空港→鳥取砂丘コナン空港	NH299	
	20:05	羽田空港→米子鬼太郎空港	NH389	

5 訪問先の概要

令和7年10月27日(月)

(1-1) 台湾日本関係協会(台北市)

〔応対者〕 張 仁久 秘書長、李 碧娟 科長、謝 明秀 薦任科員、王 瑀 薦任科員

台湾日本関係協会主催の夕食会を開催していただき、日台間、とりわけ本県が取り組む地方政府間のさらなる交流推進等について意見交換を行った。主な懇談内容は次のとおりである。

【主な懇談内容】

○ 張 仁久 秘書長 あいさつ

- ・ 大阪で副処長として4年間勤めていたなかで、当時の片山知事を台湾で案内したことがある。その際〇〇“中心”という施設名について尋ねられたので、これは英語でいう〇〇“センター”にあたる、と説明したところ、倉吉未来“中心”という命名に繋がった、という思い出がある。
- ・ 平井知事とは少年野球で縁があり、友好試合を観戦したり懇意にさせていただいた。
- ・ 台湾と日本に国交は無いが、いち早く台湾の国際交流員が配置された鳥取県は、重要な県だと認識している。20年の時を経て、こうして議員団とも交流の機会を持って嬉しく思う。心より歓迎したい。短い滞在ではあるが、台湾を堪能してほしい。

○ 意見交換

- ・ 以前、常田元議員には台湾との関係について大変尽力していただいた。現役の議員の方々とも繋がりをつくり、より関係づくりをしていきたい。



張 秘書長(中央)と訪問団の記念撮影

- ・ 日本と台湾の食文化には類似点が多く、例えば海鮮の生食もする文化なので、海産物の輸入にはいろいろな可能性がある。一方で獣害やジビエ活用については日本とは特徴が異なる。ジビエ輸入の可能性については未知数と言える。
- ・ 政治家をはじめ要職に就いている方をご案内したり対応したりすることがあるが、訪台がきっかけで次の展開を迎えた方にも何人が覚えがある。日本と台湾にはそういったご縁のようなものも感じている。
- ・ 台湾から日本へのインバウンドは多いが、日本、そして鳥取県からもっと台湾に観光に来てもらいたい。台湾の食や街並みには、日本人にも馴染みやすい魅力がたくさんあるし、文化の面で意外な違いもある。今回の滞在でも楽しんでもらえると思う。

令和7年10月28日(火)

(2-1) 公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所(台北市)

〔応対者〕 片山 和之 代表、堀江 拓水 経済部主任

公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所を訪問し、日台交流の概況、特に日台間の定期航空路線を巡る情勢や旅行需要の状況、日本製品の輸出促進にかかる現状や課題などについて、説明を受け意見交換を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○片山 和之 代表 あいさつ

- ・ 台湾と日本との間には外交関係はない。他の国と比べても、地方自治体等のより密接な関係、人同士の交流が重要である。
- ・ 今回のように地方議会が訪問し視察する機会は、そのような日台関係を担っていると言っても過言ではない。
- ・ 昨年は約600万人の台湾人が日本を訪れた。他方、増えてきてはいるが、台湾を訪れた日本人は130万人ちょっと。これはコロナ禍前のピーク時の7割。日本の方からももっと来てほしいと思う。
- ・ もちろん東京や大阪は人気ではあるが、地方を含め、今や日本人でもあまり行かないようなところにまで台湾の観光客が訪れている。そういう意味で鳥取県は潜在的な価値がまだまだあると考えている。

○概要説明

- ・ 民進党政権が発足してから1年半となる。議会と行政府がねじれの関係になっており、総統が思う政策が実現しなかったり、国会議員のリコールが起りそうになったり、内政が混乱している。
- ・ 経済のマクロ市場は好調。数字だけを見ると日本のバブル期のような状態であり、輸出額も過去最高を記録した。
- ・ 日台関係はある意味で戦後最良と言える。日本にとっては台湾は4番目、台湾にとっては日本は3番目の貿易相手。また、熊本への半導体工場進出をはじめ、ハイテク分野での相互補完的な関係を利用した投資も行われている。
- ・ 人と人との交流、地方自治体との交流も活発に行われている。世論調査では、81%の台湾人が日本に好意を持っている、77%の日本人が台湾に好意を持っている、という結果も出ている。さらに、台湾人に好きな国を尋ねると、日本と答えた人が76%とダントツ。他の



片山 代表(中央右)との記念撮影

国は数%と大きな差がある。中台兩岸情勢が厳しいこと、アメリカ政権がどのような台湾政策を行うか不透明なこともあり、日本との関係をより重視している。

- ・ 頼總統は日本に思い入れが強いようで、理由は定かではないが、そのひとつとして、祖父世代から統治下の“立派な日本人”についての話を聞いたからではないかと言われている。台南市長時代には東日本大震災や熊本地震の際には激励のために訪日したり、台湾で功労がある日本人の慰霊祭には欠かさず出席したり、日本に対して好意的な態度をとっている。
- ・ 現在の台湾との国交国は12ヶ国。このうち7ヶ国はラテンアメリカ、3ヶ国はヨーロッパの島国。このような、価値観を共有している西側諸国との関係を深めている。

○ 意見交換

- ・ 台湾から日本への留学生数のデータは手元にないが、欧米への留学生に比べると、数は多くない。逆に日本人の中国語学習者はピークと比べて減っているが、中国語を学ぶ留学先を台湾に切り替える傾向があるようだ。最近では日本の大学に英語コースも増えてきており、台湾と日本の教育交流の可能性もあるかもしれない。
- ・ 台湾人の日本への印象は世代によって異なり多層的。90代以上の年配の方は日本統治時代に日本人として教育を受けた、ある意味日本人よりも日本的な世代。そのあと国民党時代に反日教育を受けた世代があり、日本との経済的な繋がりが強く日本文化にも好意的な世代がある。
- ・ 台湾人の日本訪問の動機としてよく聞かれるのは、まず近くて安くて安全であること。また日台の友好意識も心地よく思っている。さらに日本には地方ごとに独特の風土や文化があり、小さいながら行けば行くほど行きたいところが増える、何回行っても飽きないという声がある。よく言われるようにモノからコトへ関心に移り、一人当たり GDP で比較すると台湾が日本を抜いてしまった。豊かさに驚くのではなく、細やかに先進性や洗練性に驚くような関係になっていくようになっていこうから、そのような魅力を訴えていくことがアウトバウンドに繋がるのではないか。



調査の様子

(2-2) スタートラベル (燦星国際旅行社股分有限公司) (台北市)

〔応対者〕 陳 邵軒 専員

今年5月の鳥取ー台湾直行便就航をふまえ、台湾から日本へのインバウンドの現状と課題や、さらなる誘客スポットの開拓などについて意見交換をおこなった。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 概要説明

- ・ 直行便が就航してから団体旅行はかなり安定している。9月、10月は8月までの2倍ほどになり、現時点でピークを迎えている。
- ・ 観光関係業者の来訪も受けている。いろいろと商品を紹介したが、こちらとしても様々な商品を組み合わせ、よりお客様に喜んでもらえる、あるいはコストパフォーマンスが高い行程を考え、提案している。
- ・ 現地での団体旅行は今のところ来年の3月まで派遣する予定としているが、こちらとしてはぜひ、今後もトップを目指して力を入れていきたいと考えている。



陳 専員(後列中央左)との記念撮影

○ 意見交換

- ・ 県などに紹介してもらったスポットなどは団体旅行に組み込むようにしてきたが、例えば列車による観光や体験型のコンテンツはまだ組み込んでいないところ。体験型コンテンツが不人気というよりも、観光客の年齢層が高いこと、他県の観光地と組み合わせたプランもあることから、体力を使うコンテンツは組み込みにくい。
- ・ 他地域への観光客は中年層が多いが、山陰山陽への観光客は比較的年配の方が多い。人気のコンテンツは山陰松島遊覧船だが、冬は運航していないことから、鳥取砂丘や砂の美術館にシフトしていくと考えているが、砂の美術館は砂像制作による休業期間があるため、冬季の観光スポットについては検討中。
- ・ 鳥取砂丘を中心に県東部を含むツアーが多いが、とっとり花回廊や白壁土蔵群、打吹公園などを組み込むこともある。以前は大山牧場などにも行っていたが、現在整備中のため外している。年配の観光客が多いので、登山などは組み込んでいない。温泉は人気があるので、皆生温泉周辺の宿泊先や食事処を開拓していきたい。
- ・ 鳥取県のシーフードや和牛、焼肉は人気が高い。境港市や米子市ではそういったメニューも楽しめるので組み込みたい。また一例として、中部のなしっこ館を目的とした観光客もいた。そういったところも組み込んでいきたい。



調査の様子

- ・ 観光面の鳥取県の課題として感じるのは、バス会社が少ないこと、夜遅くまで対応している飲食店が少ないことなど。バス会社は主に2社しか無く苦慮している。飲食店については、居酒屋などであれば開いているが、年配の観光客にはあまり好まれない。30人前後を収容できる場所となると難しいかもしれないが、仮に6時から夕食をスタートしたとして、せめて8時か9時くらいまで営業してくれるのが望ましい。
- ・ いわゆるベジタリアンの観光客も一定数おり、一団体に1、2人程度、あるいはたまに団体全員という場合もある。レストランに依頼して、そういったニーズにも対応してもらっている。日本の精進料理をピンポイントでツアーに組み込むことはしていないが、プロモーションとして観光関係業者に体験してもらった際は好評だった。ただし観光客の好みもあるので、今後検討していくところ。
- ・ ハイグレードな宿泊先にもニーズはあるが、予算があるので、人数が多いパッケージでは難しい。
- ・ 台湾から日本のインバウンド訪問先の調査で、昨年度からの伸長率が高かったのは、1位が境港市、2位が米子市、あとは九州という結果が出た。これからもぜひ互いに取り組みを強化していければと考える。

(2-3) タイガーエア台湾 (台北市)

[応対者] 林 巧琬 協理、劉 蓉蓉 経理、楊 栢源 組長、龔 家年 専員、趙 敏 専員

米子台湾直行便就航後の状況や、今後の展開、台湾から日本へのインバウンド誘客の現状と課題などについて意見交換を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 林 巧琬 協理 あいさつ

- ・ 代表取締役は何度も鳥取を訪問し、こういうところが魅力的だという話を何度も聞いており、さらにプロモーションさせていただきたいと何度も提案してきた。台湾の人は温泉や自然環境を目当てに日本を訪問するが、鳥取県には温泉も砂丘もあり、まさにその条件に合致している。また和牛や蟹などのグルメもあり、食パラダイスをテーマとして、これからもいろいろとプロモーションできるのではないかと考えている。
- ・ 米子台湾直行便の10月からの搭乗率は8割ほどに到達している。タイガーエアとしては今後の搭乗率と収益を重視している。鳥取県との路線はプロモーション価格で運用していた



林 協理(後列中央左) 及びタイガーエア台湾の皆様との記念撮影

ので正直これまでの収益は赤字だが、今後は知名度もますます上がって黒字になると予想している。

- ・ 当初は団体用の席を多めに用意していたが、個人旅行の顧客も多い印象がある。今のところは団体用85席、個人用95席の割合で席を計算しており、この数字は来年の3月まで維持する予定。乗客の国籍としては台湾の方が8割、日本の方は2割ほど。少なく思われるかもしれないが、これでも良い数字だと考えている。
- ・ 県からさまざまなサポートがあり、鳥取への路線に対してプロモーションを運営してきた。これからも鳥取県からの支援をいただければと思う。例えば、県から、団体客に対して何らかの補助をしたり、個人旅行者へのプロモーションや宣伝をしていただければと思う。
- ・ 鳥取県とは、来月の旅行フェアや11月末のイベントに向けて、ブースへの出店などさまざまな協力をしている。そのことについてもこの場を借りてお礼を申し上げたい。
- ・ これからも鳥取県と連携し、ますますこの路線の搭乗率と収益を上げていきたいと思う。

○ 意見交換

- ・ 鳥取県は和牛などその他のグルメより、松葉ガニに力を入れているように思う。松葉ガニは水揚げ量日本一が続いているという特徴があり、一方で和牛は質は評価されるが、各地にブランドがあることから差別化が図りにくいといった事情はある。しかし台湾からの観光客へのプロモーションとしては、季節が限定される松葉ガニだけを押し出すよりも、いろんなグルメが満喫できる、という宣伝の仕方をする事で、より期待を持たせることができると思う。また、台湾の人にとって梨はそこまで魅力的ではなかったりもする。台湾からの観光客へのプロモーションは、日本人に対するものとは違うものとして考えても良いのではないかと。
- ・ 年代に応じたプロモーションも考えていかなければならない。タイガーエア全体では20代後半から30代前半の顧客が多いが、地方空港の路線では30代後半から40代が多い。タイガーエアでは、SNSのフォロワーが多い有名な方に依頼して、鳥取県のあちらこちらを視察した。その中で、今後は鳥取の文化や歴史を紹介していてもよいのではないかと、ひとつの方向性を見出した。
- ・ 若年層の個人客にはまだプロモーション不足かもしれない。若者にとってはグルメや観光のほか、買い物できるスポットも重要。コスメやドラッグストア、日系の安価なファッションブランドなどを回れる、ショッピングモールやアウトレットにはニーズがあると思われる。
- ・ 若者はアクティビティにも関心があるが、ダイビングやスキーなどのコンテンツは北海道や東北にもある。ウィンタースポーツであれば雪の質や価格などで差別化する必要がある。鳥取県ではタイガーエアを使うとそういったアクティビティが割引になる商品もある。引



調査の様子

き続き県に支援してほしい。

- ・ まんが王国が有名なことから、ファミリーでレンタカーを使って旅行する方も多い。また若い女性向けに、健康と美をテーマとして、例えば温泉、スポーツ、グルメをうまく組み合わせプロモーションしていくことも考えていければと思う。

(2-4) 新日緑建材股分有限公司 (台中市)

[応対者] 鳥取県木材協会 前田 八壽彦 会長、霜村 芳照 副会長 (久大建材(株)会長)
新日緑建材股分有限公司 金城 尚悟 總經理

木造建築が一般的でない台湾において、鳥取県の木材製品を売り込んでいく可能性等について意見交換を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○概要説明

- ・ 令和4年12月に県産木製品チャレンジ事業をきっかけに、台湾への輸出の試みがスタートし、ジャパン建材と相談しながら進めてきた。令和5年9月には現地で展示品の組み立てを行ったり、台中市の経済発展局長を表敬訪問してPRした後、10月27日にこのショールームの開所式とテープカット、そのまま商談会を行った。
- ・ 今はLVLという、さまざまな用途に向けて加工しやすい建材を展示している。台湾はみなコンクリート造の建物で、内装材としてしか売れないため、コンクリート造の建物に合う素材のセールスに力を入れている。当面はLVLを台中市で売り出していき、台北市や台南市にも広げていきたい。
- ・ 来年度に向けては、LVLを売りながら家具を売っていきたい。ハンドメイドで一点一点作られた高級なものであり、台湾の方にも喜んでもらえると思うが、まずは人脈を作り信頼を得てからでないものは売れない。かなり時間はかかるが一度人脈を作ると広がるので、頑張っていきたい。
- ・ 台湾にあったヒノキを日本が伐採したので、台湾国内で木の伐採が禁止されている。このため原木はニュージーランド、カナダ、ヨーロッパからの輸入がほとんど。日本からも原木が欲しいと思うが、先進国の木材業の貿易としては原木ではなく加工したものを売るのが本来のかたちだと考えている。製品の価格については、損をするほど安くするのではなく、高くても丁寧につくった商品を売り出している。



前田 会長 (後列中央左) はじめ新日緑建材股分有限公司の
皆様との記念撮影

○ 意見交換

- ・ ショールームができてから内装材の売り込みは順調に進んでいる。ただ固定客は北部の建材問屋が1件だけなので、年度末にかけて台中台南で一件ずつ固定客を見つけられればと考えているところ。
- ・ 建材なので一般客への販売には馴染まないが、家具屋に対しての提案はまだこれから。安価に売るのはなく、付加価値に見合った価格で売っていききたい。
- ・ 関税などもかかるため高価な商品にはなっている。東南アジアでは広葉樹が一般的なところに、日本の針葉樹の魅力をぶつけていくのがミッションになる。広葉樹は重くて硬い。針葉樹が軽くて柔らかい。このため台湾では針葉樹の木材にまだまだネガティブイメージがある。しかし合板LVLは強度が高い素材なので、その点を提案していききたい。韓国で杉材というものを理解してもらうのに3年かかった。台湾でも時間がかかるものと思って取り組んでいる。
- ・ 日本の木材の中で鳥取県産材を売り出せているのは、ジャパン建材が協力してくれたから。前社長と前田会長の熱意がきっかけで始まった。採算がわからない中で挑戦できている。
- ・ 日本文化などに愛着を持っている層に向けて、和風という印象で売っていくことも考えている。ショールームに入った方も、いい香りだと好印象を抱いてくれていると感じる。今展示しているような、陶器や木製の工芸品も一緒に販売している。
- ・ 台湾は湿度が高いので、木の良さをわかってもらえる余地があると考えている。



調査の様子

令和7年10月29日(水)

(3-1) 台中市立日南国民中学校(台中市)

[応対者] 台中市立日南国民中学校 鄭 清峰 校長、台中市議会議員 施 志昌 氏、
台中市政府教育局 李 昭嫻 督学 ほか

台中市内中学校における国際交流の取組や、教育旅行をきっかけとした本県学校間の交流のさらなる発展について意見交換を行った。まず鄭 清峰 校長と議員団で意見交換を行い、次に、施 志昌 台中市議会議員や李 昭嫻 督学、各校の校長を加え、日南国民中学校の取組の説明を受け、参加者の意見が交わされた。主な意見交換内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○鄭 清峰 校長 意見交換内容

- ・ 日南国民中学校は台中市でも郊外にある学校なので、都会と比べて恵まれな
い家庭の子も通っている。さまざまな
境遇の生徒へのサポートや、より充実
した学習環境を模索しているところ。
その中で、日本や韓国をはじめとした
海外との交流を積極的に進めている。
- ・ 台湾を修学旅行先とする高校はある
が、大抵は台北市を訪問する。台中市
にも来てもらいたいし、学校にも訪れて
もらいたい。中学校との交流は進めているが、高校同士の交流ももっと推進したいと考
えている。
- ・ 台中市には進学校や工業高校、農業高校や高等専門学校などさまざまな学校があり、訪台
する学校に合わせてマッチングすることもできる。
- ・ 実現には現地の市議会、行政、そして鳥取県の関係者の協力が必要。大きなプロジェクト
になる。ぜひ力添えしてほしい。
- ・ 教育交流は隔年で実施しているが、さらに緊密にすることで、学生が卒業して将来の日台
関係に良い影響を及ぼすことが期待できる。
- ・ オンラインでの交流をしている学校もあるが、ぜひ現地を訪れてほしい。機会があれば、
例えば日本の校長先生の視察団を組んでもらって、自らご案内したい。
- ・ 教育交流の中で生徒だけでなく、先生同士も交流するような時間を設けるのも有効な
のではないかと。



鄭 校長との懇談の様子

○台中市政府教育局 李 昭嫻 督学 あいさつ

- ・ 台湾と日本の交流はかなり盛んであり、教育交流も増えている。特に台湾ではいろんな学
校が教育交流に関心を持ち、参加するようになっている。
- ・ 日南中学校の協力で教育交流についてのさまざまな取組が進んでいる。今後もより良い教
育ができるよう、教育局としても力添えしていきたい。

○台中市議会議員 施 志昌 氏 あいさつ

- ・ 5、6年前にサイクリングのイベントで鳥取県を訪れた。その際、海と山に囲まれている
ことや砂が多いことなど、大甲区と鳥取県は自然環境がよく似ていると感じた。
- ・ 鳥取県と台中市の交流はもう20年以上続いており、この状況を我々も支持している。
- ・ この夏、鄭校長と他の先生とともに鳥取県を訪問した。その際、日台交流の経験が豊富な
鄭校長に、台湾の高校生と日本の高校生の交流を推進したいと相談した。台中市議会とし
てもこのような交流をサポートしていきたい。

○ 取組説明概要

- ・ 日南国民中学校では日本や韓国の学校との現地交流やインドの学校とのオンライン交流を行い、国際交流を進めている。
- ・ 鳥取県の各町と協定を結び、中学校同士の交流事業を続けている。両校の生徒が一緒に、特にその学校ならではの授業を受けること、ホームステイを設けることにこだわっている。スケジュールのうち1日はホームステイ先に日程を任せ、それぞれの家庭でひとりひとり違う体験ができる時間としている。
- ・ 台湾の学校を訪問された際は、校内のスタンプラリーを企画することで学校の各所を回ってもらった。またベトナム文化を体験する授業も行った。これは近年東南アジアからの移民が増えており、その文化を取り入れ共生していくべきという考えに基づいた、学校独自の授業。
- ・ 鳥取県内には様々な高校がある。今の教育交流は中学校が中心となっている。先のことにはなるが、台中市と鳥取県で高校同士の交流も進めていきたい。ぜひ力添えをしてほしい。



取組説明の様子

○ 意見交換

- ・ この夏の訪問で鄭校長は鳥取県の教育委員会とも面識がある。高校同士の交流や先生同士の交流について、教育委員会とも進めていきたい。また執行部と教育委員会の間を取り持つのが政治家の役目。簡単なことではないので時間はかかるだろうが、直行便就航により交流フェーズが変わってくる、さらに進化していくと思われる。これからも教育交流が推進されるよう取り組んでいきたい。
- ・ 台湾の高校生が日本の高校を訪れる際に、どのような授業を受けるか、どのような体験をするか、ということについては、誰かが決めてしまうのではなく、両校がお互い話し合う中で決めていくのが良い。それぞれの学校の特色を見たいので、学校の方から独自の授業を紹介してほしい。
- ・ 高校を相互訪問し一緒に体験することで、表面的ではない深い交流ができると考えている。



鄭校長との意見交換

(3-2) 裕毛屋 (公益店) (台中市)

〔応対者〕 謝 明達 社長、姜 甜香 社長秘書、王 煜光 公益店店長、李 穎超 組長

台中市等で高級スーパーを展開する裕毛屋の公益店を訪問し、鳥取県をはじめとした日本の地方自治体と連携した商品の販売状況を調査するとともに、今後の鳥取県産品の輸出・販路拡大策について意見交換を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

- 10月22日から27日までの6日間、鳥取県の日野高校と境港総合技術高校の生徒による実地研修が行われた。また10月24日から26日までの3日間、鳥取県物産店を開催し、県産品のPR販売を実施した。物産展が終了した後も、鳥取県産の梨や乳製品、日本酒、特産品など、スペースを広く取って販売している。
- 日本から輸入された高品質な食品を多く取り揃えている。決して安価な値段ではないが、健康志向の高所得層が訪れるスーパーとなっている。
- 無添加自社製品の品質向上にこだわっており、他社にはない技術を用いた真空パック食品や冷凍食品を製作している。また生鮮食品売り場の照明で商品の色味を誤魔化さないなど、安心して購入していただけるよう工夫を凝らしている。
- 生鮮食品をそのまま真空パックにしたものだけでなく、調味済みでそのまま温めたり加熱したりしてすぐに食べられる商品や、少人数世帯にも使いやすい少量パックの商品も展開している。台湾は時間をかけて自炊をする文化ではないため、簡単に調理できる商品には高いニーズがある。
- 無添加にこだわっているため、保存期間が長いわけではないし価格も高い。しかし食品の安全性や品質を求める客層には理解され、選ばれ続けている。
- 海産物やジビエなど、鳥取県産の食品の輸入にはまだまだ可能性がある。さまざまなハードルはあるが、今後も新しい商品展開を模索していく。



謝 社長 (中央) との記念撮影



店内に県産品が陳列されている様子



裕毛屋の自社製品が陳列されている様子



店内での 謝 社長（左端）による説明

（3-3）台中市政府（台中市）

〔応対者〕 張 大春 副秘書長、林 谷隆 數位發展局長、謝 佳蓁 秘書處長 ほか

台中市政府を訪問し、デジタル技術を生かした行政運営、女性活躍に向けた取組、日南中学校での調査を踏まえた教育交流のさらなる推進などについて意見交換を行った。また災害に備えた取組について調査するため、災害救助犬訓練センターおよび921地震教育園區を訪問し、視察を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 張 大春 副秘書長 あいさつ

- ・ 台中市と鳥取県はこれまで非常に密接に関わってきた。台中市の各部署から区役所まで、さまざまなレベルで深く交流してきている。
- ・ 鳥取県といえばゲゲゲの鬼太郎やコナンなどの作品が台湾でも多くの人に好かれている。台湾人の旅行先として日本は大変人気で、当然その中で鳥取県を訪れる人もたくさんいる。
- ・ 観光や旅行のみならず、文化面での交流にも期待している。鳥取県では3月に県立美術館がオープンしたが、台中市でも今年の12月に図書館と美術館が一体となった台湾初の文化施設「台中緑美図」が開設される予定。この施設のデザインは日本の有名な建築家が手掛けている。
- ・ このように縁が深い日本、そして鳥取県と、今後さらに交流を強化し、鳥取の多くの人たちに台中市を訪れてほしい。



張 副秘書長をはじめ台中市政府の応対者と訪問団の記念撮影

○ 台中市政府 意見交換

- ・ 裕毛屋の謝社長をはじめ、台中市の国際交流員は実践力がある方ばかり。両国の互いに精通している人材を活用して、今後も交流を進めていければと考えている。
- ・ 高校生同士の教育交流については、素晴らしい提案であるとする。関係部局や市長にも自分から話を持ち掛けて実現したい。
- ・ 台中市は2022年に、台湾で初めてとなるデジタル局を設けた。今後もスマートシティとAI活用に力を入れたい。
- ・ 交通面では、台中市の人口は、283万人で台湾第2位だが、台北市に比べると渋滞がそこまで深刻ではない。これはAIの技術を使ってスマート・トラフィックの取組を行っているからである。また、TCPASSという台中市独自のアプリを展開しており、2006項目ものサービスを提供している。例えば妊産婦専用の配車システムなどを実現させ、定期検査や子どものワクチン接種などのニーズに対応している。283万人の人口に対し、ダウンロード数は300万を超えた。
- ・ 台中市の市長は台湾で唯一の女性市長。市民には「お母さん」の愛称で慕われている。台中市は台湾の中でも男女平等を目指し女性を尊重する自治体。ちなみに副議長も女性が担っている。市議会の女性割合は35%ほど、市内の区長の4、5割は女性が務めるなど、女性が政治的に活躍している市と言える。

○ 災害救助犬訓練センター 視察

- ・ 台湾では1999年に発生した921地震以降、救助犬の訓練の技術を発展させてきた。
- ・ 災害救助犬は“服従”と“サーチ”の両方のテストに合格しないと出動することができない。
- ・ この施設では“服従”の訓練をおこなっている。“サーチ”の訓練は921地震教育園區で行う。当時倒壊した建造物をそのまま利用しているため、効果的な訓練ができている。



災害救助犬訓練センターの皆様との記念撮影

○921地震教育園區 視察

- 1999年に発生した921地震の記憶を次の世代に伝えるために設立された。921地震で倒壊した実際に倒壊した校舎を保存し、震災の実態と防災の大切さをより実感できる施設となっている。民間の機関が9億台湾ドルかけて建設したものを政府に寄贈した。



921 地震教育園區の皆様との記念撮影

- 921地震の断層を遺跡として保存した施設や、921地震に関連する写真や映像資料を鑑賞する映像館など、さまざまな展示がある。映像館では地震体験シアターが備わっており、地震の揺れを体感しながら当時の被災状態を知ることができる。なお、東日本大震災をテーマとした映像作品も上映される。
- これまでに500万人以上が来館しており、そのうち4分の1を学生の団体客が占めている。年間25万人から30万人が訪れ、そのうち外国人が10%ほど。観光客では、地震が少ないマレーシアやシンガポールの方が地震の実態を学びに来る。リピーターの割合も高い。
- 防災のさまざまな面を学ぶこと、子どものうちから学ぶこと、遊びを交えて学ぶこと、の3点を大切にしている。例えば地震に強い建物の模型を作ってコンテストを開催したり、被災地での宿泊体験をしたり、体験型の防災学習を毎年行っている。
- 921地震では2400人以上が死亡したが火災による死亡はゼロだった。火災が起こったのは酒工場1カ所のみ。木造建築が少ないこと、人口密度が少なくガス管ではなくプロパンガスによるガス供給であったことなどが理由だと考えられる。
- 台湾では災害の種類によって避難所を分けている。立地によって使用しやすさに違いが出る災害があるため。また二次被害対策のひとつとして、避難所内に感染症に対応できる医療ステーションを設け、隔離することになっている。
- 台湾での避難所は、公園、学校、公民館、ホールなどを利用する。整備は主に区役所の管轄で、毎年安全点検を行っている。物資は業者と契約して定期的に補充する仕組みとなっている。